

丹波焼の里 ミュゼシター

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

2024
autumn
winter
vol.
36

丹波の手仕事 匠の技 22

昇陽窯「鎬象嵌」 大上 裕氏 裕樹氏

『逸品!』兵庫陶芸美術館

学芸員 私のオススメ作品

丹波焼の里の楽しみ方、色々 パート4

やきもの通りと陶板レリーフ

インタビュー 鼎談

この先に見えるもの

ー丹波焼の里と兵庫陶芸美術館ー

西垣 鉄也氏・市野 達也氏・田林 信哉氏

大上 裕樹 作「彗星」



昇陽窯 大上 裕・裕樹

〒669・2114

兵庫県丹波篠山市今田町下立杭8

電話 079・597・2213

文・増田 知子 写真・中西 俊介 迫田 隆



丹波の手仕事

匠の技 22

昇陽窯「鎬象嵌」 大上 裕氏・裕樹氏

代々続く陶家の次男として生まれ、一時は焼き物以外の道に進むことも考えた初代大上昇氏が父の死をきっかけに作陶の道を選び、1968年独立、下立杭と上立杭の境の高台に「昇窯（現・昇陽窯）」を創窯。そのバトンを二代目裕氏、三代目裕樹氏がつなぎます。

伝統工芸士でもある裕氏の理想は「中庸」。主張し過ぎず、しかし存在感のある作品。優しい器を作りたいとおっしゃいます。海老絵など、伝統的でありながら現在の暮らしにもマッチする作品を生み出されています。

そんな父から「いろいろなものを見て遠まわりすればよい」と助言を受けた裕樹氏は、金沢の美術工芸大学で陶芸を専攻。憧れの陶芸家板橋廣美氏の指導を受けます。卒業後は3年間美濃で鈴木五郎氏に師事。鈴木氏からは造形はもとより、釉薬づくりや土づくりも学び、丹波に戻られました。

自窯では、民芸の技でもあり丹波の伝統の技ともいえる「鎬」を生かした作品を追求。その過程で生まれたのが「鎬象嵌」でした。鎬いだ後、パーツを貼り付けて再構築、白化粧と、茶色の素地から生まれる繊細でシャープな装飾は類を見ません。

伝統を守りながら変化を続けていくのも丹波焼の魅力ですが、昨年スタートした「陶泊」はごく日常の窯元での暮らしを体験できる一泊二日で、そのお客様を裕樹氏と奥様がもてなされています。昇陽窯では「陶泊」以前から陶芸修行のインターンも受け入れ、次代の担い手も意識しつつ「百年後の丹波も陶芸の郷であり続けてほしい」との裕樹氏の思いが、末永く人々の集うやきものの里へとつながっていくように感じました。



大上 裕作 海老徳利

陶の郷が 文化観光拠点に認定

「陶の郷」を中核とした丹波焼の郷文化観光拠点計画が、令和5年9月に大臣認定されました。計画は令和5年～9年までの5か年計画です。

陶の郷展示棟（伝産会館・伝習会館）の改修など施設の機能強化を図ると共に、窯跡発掘調査や情報通信技術による展示解説の整備により「陶の郷」が地域の文化観光拠点となることを目指します。

一方、陶の郷即売場改修整備（POSシステム、リアルタイム在庫管理、キャッシュレス会計）、E-BIKEレンタルなどは既に実施され、令和6年4月末にリニューアルオープンしています。

また、大阪・関西万博に向けたフィールドパビリオン「プレミアプログラム『日本六古窯』丹波焼の里を訪ねる」への取り組みで「陶泊」がスタートしています。農山漁村滞在型旅行・農泊の陶芸版で、窯元宅に民泊して陶芸家の日常作業に触れ交流を深めて、窯元の美意識や作品へのこだわりを感じる事ができます。

兵庫陶芸美術館は美術の視点で丹波焼の文化的価値を伝えていきます。令和7年には開館20周年を迎え「丹波焼最古の登り窯」を活用した焼成イベントが予定されています。

丹波の歴史・伝統を観光資源として、クリエイティブバレー構想の実現に向けて地域が連携して動き始めました。



陶の郷 窯元横丁

文・藤枝憲文 写真・迫田隆

おめでとう ごさいます

令和6年

兵庫県功労者表彰（文化功労）

三木哲夫氏

（兵庫陶芸美術館名誉館長）

清水圭一氏「かねと窯」

（兵庫県工芸美術作家協会理事長）

兵庫陶芸美術館創設「YH賞」 第3回受賞作品決定



「昨年創設の「YH賞」の第3回受賞作品が、橋本知成氏（1990年）の『Untitled』（2023年）に決定しました。橋本氏は、陶（土・火）を用いる意味を真摯に問いながら、原初と洗練の融合する独自の立体造形に取り組んでいます。シンプルながらフォルムですが、土に入った亀裂や、炭化焼成によって金属質の窯変を見せる釉薬の表情からは、力強い最初のエネルギーが感じられます。建築素材であるモルタルと組み合わせた本作品は、作者を代表するシリーズの一つ。建築空間とも響き合う、新しい世代の洗練された感覚が活かされています。

学芸員 マルテル坂本牧子

丹波焼の里の 楽しみ方、色々 パート4

やきもの通りと陶板レリーフ



丹波一窯から最古の登窯の前を通って窯元のぼり窯までの400m程の道は、現在の県道292号線が開通するまでは、立杭の主要道路で今では、旧道とも、やきもの通りと呼ばれています。



やきもの通りの両側には、窯元さんのギャラリーがいくつも並んでいます。途中には、やきもの通りから山手の方へ向かう小道が何本もあり、その先にも窯元さんの工房やギャラリーがあります。時間のある方は、これらのギャラリーを覗かれると気に入った作品に出会えるかもしれませんね。



やきもの通りには日本遺産まちづくり応援事業の一環として、設置された丹波焼の陶板が敷かれています。数m毎に地面に埋め込まれている陶板のレリーフは、23軒の窯元さん達の個性豊かなデザイン作品で楽しいアクセントになっています。足元にも目を配って楽しんで下さい。



丹波の歴史・伝統を観光資源として、クリエイティブバレー構想の実現に向けて地域が連携して動き始めました。

文・写真 植田正実

「逸品」 兵庫陶芸美術館 学芸員 私のおススメ作品



丹波「灰釉四耳壺」
江戸時代前期（17世紀）
兵庫陶芸美術館
「丹波焼の世界 season8」展に出品

17世紀の半ば頃、害窯（あながま）から登窯（のぼりがま）へと転換し、近世丹波焼が成立します。窯構造の刷新とともに、器種にも変化が見られ、器面に塗った土部が赤く発色した赤土器、草木の灰を生み出した灰釉など各種の釉薬が生み出されました。丹波では、これら器面装飾を用いて、中世から作り続けてきた壺、甕、播鉢の主要器種に加え、肩部に三つもしくは四つの耳を付けた「葉茶壺」が新たに作られました。

「葉茶壺」は、もとは中国南部などで作られた「唐物（からもの）」の壺を日本で茶の葉を入れる容器として転用したものです。この壺は、鉄釉を施した耳付きの壺で、穀物や水・酒などを入れる貯蔵・運搬の容器として日本に持ち込まれました。室町時代後期に「茶の湯」が流行すると、葉茶壺の需用が拡大し、瀬戸（愛知県）や備前（岡山県）、信楽（滋賀県）などで唐物茶壺を模した葉茶壺が作られました。丹波でも、近世に導入された施釉技術を用いて、唐物と見まがう葉茶壺が数多く製作されました。

本作は、丸く大きく張り出した肩上部に帯状の耳を横方向に四つ付け、頸部付け根および胴部に二重の沈線を巡らせています。口縁部から胴部にかけて鉄釉を施していますが、胴下半部は「土見せ」にしています。

丹波の葉茶壺は、寛永15年（1638）の序がある俳諧論書『毛吹草（けふきぐさ）』に丹波の名物と謳われ、数多く生産されました。

学芸員 萩原英子

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で
ゆったり、のんびり、ほかほか。
農産物直売所、軽食コーナーも併設、
1日ゆっくりお過ごしください。



◆ 入浴料 ◆
大人 800 円
（中学生以上）
小人 400 円
（小学生）
※小学生未満 無料

営業時間

AM10:00 ~ PM9:00 (PM8:30 受付終了)
※営業時間は変更になることがあります。

定休日 毎週火曜日（祝日は営業）

〒669-2153

兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10

TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>



HP

Twitter



Instagram



この先に見えるもの — 丹波焼の里と兵庫陶芸美術館 —

兵庫陶芸美術館館長

西垣 鉄也 氏

兵庫陶芸美術館副館長

市野 達也 氏

兵庫県政策コーディネーター

田林 信哉 氏



この4月には兵庫陶芸美術館では館長が替わられ、組合の理事長が副館長に就任されたり、陶の郷を中心に新たなビジョンを考えられているとか大きな転機を迎えています。

西垣…この4月に館長として着任いたしました。以前3年間総務課長として勤務しておりました。美術館は陶芸文化の振興が目的ですが、私はこれまで産業振興部門での勤務経験が長く、丹波焼の振興にも携わっていました。6年ぶりの勤務ですが、以前と比べると、レストラン、カフェの新設や陶の郷のリニューアルなど、この里全体が前に向かって進んでいるなあと感じています。

市野…陶磁器組合の理事長に就任して3年、4年目に入っています。以前からお伝えさせていただいているのですが、陶の郷と陶芸美術館との関係性はものすごく重要で、一緒にやってみないと、この里の活性化はなにも常にも思っておりません。私は学術的なことは分かりませんが、一人の作り手、また里のことはよく知っている人間として、これまで知らなかった美術館の方のご苦労を知ることができました。館の方とお話をして、里が今何を求めているのかを館の皆さんにも少しは分かっていたらいいんじゃないかなと思っています。

今この時期、立杭で大きな動きがあると感じるのですが、そのきっかけを作られたのが田林さんじゃないかと。

田林…私がきっかけになったわけではなくて、元々窯元さん達の潜在的な思いとか、市野さんが理事長として、里をもっと盛り上げていきたいというとても強い思いがあって、それがエンジンになっていると思います。窯元さんや陶磁器組合だけでは形にしていけないのが難しいので、美術館との連携もそうですし、市や県国から支援を受ける形を作っていくためには、地域の体制、チームを作っていくのが最も大事なことで考えています。そのコミュニケーションの場を作ったり、橋渡しするお手伝いをさせてもらっている感覚です。

『陶の郷』を中核とした丹波焼の郷文化観光拠点計画」が2023年の9月から文化庁の認定を受けて始まりましたが、その計画を立てる前にまず現状を知ろうということで「丹波焼クリエイティブ・バレー構想」というのが始められたんですね。

田林…文化観光を進めていくにも地域で共有できていないと進まないで、将来どういう方向に向かっていくのかを組合として策定していただきました。丹波焼とか窯元さんの価値が上がる方向で作っていく軸を描きつつも、窯元さんとか地域がやりたいことがまずあって、それをサポートして形にしていこうというイメージで仕事をさせてもらっています。

丹波篠山や立杭についての将来についてはどのように考えておられるのでしょうか。

田林…立杭の本質は、共同で里を運営している横のつながりと、それぞれ自由な発想でクリエイティブなものを作られている、世代を超えてその流れがずっと続いてきているという縦の組み合わせが、すごくシナジーを生んでいることです。そこをより強化していく。個人が発揮した創造性や頑張り、また共同体の力を強くする。この良い循環が立杭の本質、貴重な価値です。

市野…組合では、2年前から田林さんをはじめ、3名の外部専門家から、いろいろな考えを実行するための支援を受けています。これまでは、組合員窯元だけで議論し、計画・実行してきましたが、これまでと同じやり方では、里は伸びないと思ったからです。窯元はこの里の作り手なんです。先輩方の経験や若手の行動力・アイデアも必要ですが、それだけじゃなく専門的な知識や情報、ネットワークなどが必要で、立杭の将来を切り拓くために専門家の力を借りることにしました。立杭の将来をどう描き、何から取り組むのか、どんな風に関係機関を巻き込んでいくのか、またそのために組織をどのように改革していくべきか、専門家や関係機関の皆さんの力を借りて、一

緒に考え取り組んでいきたいです。特に美術館との連携は重要なんです。みんなの力がまとまったらすごく大きな力になると思います。

美術館は来年創立20年を迎えますが。

西垣…この丹波焼の里に兵庫陶芸美術館が開館したことは大きな意味があると思っています。先ほど田林さんがおっしゃっていただいた丹波焼の強みですが、丹波焼は後継者が育っていて、産地全体で前に進んでいかれているところが象徴的であると思います。陶芸美術館は、この歴史と伝統のある丹波焼の里に立地し、この地ならではの自然豊かな周りの風景をいかし、陶の郷や地元陶芸作家の方々とも連携して、丹波焼の里がさらに活性化するように、展覧会やイベント事業等に取り組んでいきたいと思っています。

最後に丹波立杭の将来や陶芸美術館について一言お願いします。

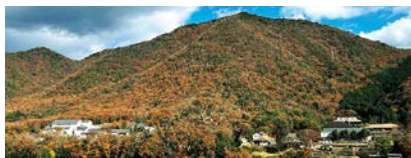
田林…消費されるような観光地化や高付加価値化が目的になるよりは、やっぱり焼き物を作ったから産地なので、生業としての丹波焼が展開することが一番大事で、それに資する交流の形があると思うんですね。今丹波焼のファンになってくれている方々とか、陶の郷に毎年来てくれている方々があり、陶の郷との関わりを強くして、力になってくれるような関係をどうやって築いていけるのかとか、身近な部分から押さえていきつつ、息の長い交流のあり方を目指していくのが大事だと思います。

西垣…4月から組合の市野理事長に美術館の副館長に就任いただきました。これまで、「近くて遠い美術館と陶の郷」との声も聞いていましたが、これを機に、これまで以上に連携を深めていきたいと思っています。我々も知っていただけではない部分も多々あったと思っています。ですので、職員が集まって意見交換する会議に副館長に出席いただき、美術館の職員が何を考えて、どんなことをやっているのかということを実際に知っていただくことも大事だと思います。そうする

ことで、これまで以上に陶の郷と連携した取り組みが可能になると思います。

市野…交通アクセスの問題については、自動車であられる方が大半です。今後、大阪・関西万博やインバウンド関係に向けても、鉄道・バスを利用される方々にもっと分かりやすくアクセス方法や交通ダイヤを検索できるように考えていきたいと思っています。これまで陶芸美術館や陶の郷、こんだ薬師温泉、清水寺などの単体で調べるようになっていたものを文化観光拠点の観点からも、面であってよくようにして、よりたくさんの方の皆さんの目にしていただけるようにしていきたいと思っています。

本日はお忙しいなか、いろいろと貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。



丹波焼クリエイティブ・バレー構想



「陶の郷」を中核とした丹波焼の郷文化観光拠点計画



西垣 鉄也 氏

2024年～兵庫陶芸美術館 館長
2022～2024年 兵庫県産業労働部総務課長
2015～2018年 兵庫陶芸美術館所長補佐兼総務課長

市野 達也 氏(市野伝市案)

2024年～兵庫陶芸美術館 副館長
2021年～丹波立杭焼陶磁器協同組合理事長

田林 信哉 氏

2024年～兵庫県政策コーディネーター
2024年～丹波立杭陶磁器協同組合アドバイザー
2022年～兵庫県地域創生戦略会議座長
2005年～2020年 総務省

●特別展のご案内

九谷赤絵の極致

宮本屋窯と飯田屋八郎右衛門の世界

9月7日(土)～11月24日(日)

赤絵の細密描写で名高い再興九谷の宮本屋窯(天保3～安政6年)。その存在は、明治以降の輸出九谷の誕生や発展につながりました。主工の飯田屋八郎右衛門は、赤絵細描に優れた手腕を発揮し、この様式は「八郎手」や「飯田屋」と呼ばれています。本展では、今に伝わる宮本屋窯の優品を一堂に会し、その魅力を紹介しします。



宮本屋窯 《墨出青松煙図瓢形大瓶》
江戸時代後期 石川県九谷焼美術館

TAMBA NOW+ 2025

2025年1月2日(木)～2月28日(金)

兵庫陶芸美術館では、開館10周年を迎えた2015年より、5年の節目には、丹波立杭や丹波篠山市域で活躍している作家を紹介する「TAMBA NOW+」を開催してきました。2025年には、その第3弾として「TAMBA NOW+ 2025」を開催し、丹波のやきものの今の姿を幅広く紹介します。

兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表)

HP <https://www.mcart.jp>

●テーマ展のご案内

2024年度著名作家招聘事業×テーマ展

重松あゆみ展

2025年1月2日(木)～2月28日(金)

「内と外」との関係性やかたちが生まれる仕組みとその構造を解き明かすという強い衝動に導かれながら、陶による独立した立体造形を追求している重松あゆみ(1958-)。近年、縄文土器に触発され、制作を続けている《縄文シリーズ》を中心に、土と炎と現代を結ぶ独自の造形に迫ります。



重松あゆみ 《Lunar Flame》
2018年 撮影：後藤清

丹波焼の世界 season 8

3月9日(土)～12月8日(日)

2017年、丹波焼は日本六古窯の一つとして日本遺産に認定されました。平安時代末期以降、800年以上にわたり時代の求めに応じて変化しながら作り続けられてきた丹波焼の世界をお楽しみ下さい。

※2025年1月2日(木)からは、丹波焼の世界 season 9が始まります。



丹波 《壺》
室町時代中期
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション)
兵庫県指定重要有形文化財

丹波焼の里情報コーナーのご案内

「丹波焼 兵庫県文化賞受賞者」

9月6日(金)～11月24日(日)

「TAMBA CLASSIC+」

2025年1月2日(木)～2月28日(金)

兵庫陶芸美術館 展示棟入口横 観覧無料
企画：陶芸文化プロデューサー
協力：丹波焼窯元等

プレゼントのお知らせ

兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。

●応募方法

ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(○美術館など)・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。

●締め切り

2月末日消印有効。応募多数の場合は抽選。

●宛先

〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
当選発表は発送をもって代えさせていただきます。

★丹波焼の里 丹波立杭デジタルマップができました。QRコードにより、スマホやPCからも利用いただけます。
<https://tanbayaki.jp/place-2-b.jp>



○ぬくもりの郷
「郷めぐり」特別入浴券を陶の郷にて販売
10月12日(土) ▼問合せ ☎079-590-3377

○兵庫陶芸美術館
ミュージアムマルシェ
10月12日(土)・19日(土) エントランス棟前広場
プレゼント 両日共、先着50名様に丹波焼小皿を贈呈
旬の味覚市、クラフト市、体験市を催し、秋の丹波焼の里の魅力を紹介します
・陶芸文化プロデューサー
・最古の登窯案内など
・コミュニティギャラリー展示
「陶芸二人展 Part 2」
▼問合せ ☎079-597-3961

○窯元めぐり市
・窯元イチ推し展 期間中開催
・土曜うつわ市 10月12日(土)
・土曜マルシェ 10月12日(土)・19日(土)
・平日クイーン抽選

○陶の郷(丹波立杭陶磁器協同組合)
▼問合せ ☎079-597-2034

第47回 丹波焼陶器まつり「秋の郷めぐり」
丹波焼の魅力あふれるイベントが開催されます。
【期間】10月11日(金)～10月20日(日)
※10月15日(火)陶の郷休園に伴い窯元イベントもお休み

イベント案内

立杭 陶の郷

〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
URL.<https://tanbayaki.com>

【入園料】高校生以上 200円

小中学生 50円

【開園時間】AM10:00～PM5:00 (通年)

【休園日】年末年始

毎週火曜日

(但し、祝日は営業します。)

丹波焼を『見る・作る・楽しむ』

窯元横丁

丹波焼の50軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティストックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分で歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸体験してみませんか。小さなお子様からご高齢の方まで、手びねり(粘土細工)や絵付け体験に挑戦していただけます。釉薬をかけて焼き上げてから、ご自宅まで宅配便で発送いたします。あなただけのオリジナルやきものをつくってみるのも楽しいですよ。